
君には届かない言葉

遠藤 沙弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君には届かない言葉

【Nコード】

N1440P

【作者名】

遠藤 沙弥

【あらすじ】

平凡な日々をのんびりと送っていた。そんな愛すべき日常が音を立てて崩れた。いつの間にか、隣に全裸で寝ている美少女！？暴走する妹！？母は見てるだけ！？ドタバタ騒がしい日常が始まるみたいです……。

第一話

朝、木島湊は暑苦しさで目が覚めた。
きしまみなと

季節は桜が散り始めてきた5月。寒くもないし、暑くもない快適な季節のはずだった。

（また妹が布団に潜り込んででも来たのかな……）

たまに朝起きると隣に妹の木島千夏が寝ていたりする。
きしま ちなつ

俺は今年で高校2年だし、千夏も今年で中学3年生だ。そろそろ親離れならぬ、兄離れしてもらいたい。

俺の両親は去年から外国で仕事の為不在だ。お母さんは家事の全般を僕に叩きこんで、「千夏の事よろしくね」と任されてしまった。

（そろそろ起きるか……）

俺は上半身を起こして、隣に千夏がいるだろうと思って見た。

「ほら千夏。そろそろ起きないと……」

「んにゅ……」

あれ、おかしいな？ 千夏ってこんなに髪長かったかな？ ってそんなことより……。

「うわぁ!？」

慌てて布団から抜け出し後ろに下がった。隣に居たのは千夏じゃなかった。

そして、全裸だった。何も着てなかった。チラッと大きな胸とか見えてしまった。

「えーっと、うわ、どうしたらいいんだろ……」

あたふたしながらベットの前で考えていると、ベットの中がもぞもぞ動いた。

「んゝ、あれ、ここどこだろ」

起き上がって周りをキョロキョロ見ている。もちろん、何も着てないので胸とかばっちり見えてしまった。しまった、ぼーっとしている場合では無かった。

「あ、あの、もしもし?」

「あ……! 湊だ!」

「え? 何で俺の名前を知って……」

「湊!」

「!??」

女の人は布団から出てくると迷わず俺に抱きついてきた。俺はそのまま頭の中が真っ白になってしまった。

「湊、湊、湊……。会いたかったよ……」

よっぽど俺に会いたかったのか女の方は涙をポロポロこぼしながら俺の名前を呟いた。

「……………うあ」

女の人のいい匂いとかさつきからむにむにと当たってる胸の感触とか、刺激が強すぎて思わず鼻血が出た。そのまま頭が沸騰してしまふかと思った。

「お兄ちゃんおはよー、そろそろ朝食にしようー……」

うわー、とつてもいいタイミングで千夏が部屋に入ってきた。

「あ、千夏！？ これは違うんだ！ えーっと何て言えばいいか」

「何が違うんですか！ お兄ちゃんのえっち！ とにかく離れてください！」

俺の腕を強引に引っ張って女の人からひきはがすと俺はそのまま部屋の外に放り出された。

「お兄ちゃんは「入っていい」っていうまで入っちゃダメです！」

そのままバタンツと乱暴に扉が閉められた。俺も一度冷静になるために顔を洗いに行った。

その後10分後くらいに入室の許可が出て中に入ると、女の方は裸

にYシャツというなんともえっちな姿でベットに座っていた。

「何で裸にYシャツなの……？」

「それしか着るものがなかったんです！ そんなことより、説明してもらいますよ！ この人は誰ですか！」

「誰っていつか……、うーん」

「ま、まさか、お兄ちゃんの彼女？」

「違う！ 実は俺にもわからないんだ。朝起きたら隣で寝てたんだ」

「隣で寝てたの！？ なんて羨まし……じゃなかった、なんで！？」

「俺にもわからない。本人に聞いてくれ」

「そうですね……。えっと、お名前は何ですか？」

女の人の方へ直接聞くことに。二人で女の人の方へ体を向ける。改めてみると顔はまだ幼い感じで俺よりも年下な感じがした。

「……みやこ」

「あの、できればフルネームで教えてもらえると助かるんですけど……」

「わからない……」

「わからない？」

「思い出せない……」

「えーっと、じゃあ年齢とかは？ どこ出身とかは？」

女の人は静かに頭をふるふると左右に振った。俺は千夏と顔を見合わせてしまった。

「記憶喪失なのか？」

「でも、お兄ちゃんの事は知ってたんですね？」

「湊の事しか覚えてない。でも、なんで湊のことを覚えているのかわからない」

「俺達どこかで会ったことあったっけ？」

「わからない……。でも、湊って名前を聞くと嬉しくなって胸がドキドキするの」

「みやこさん、お兄ちゃんを誘惑するのはやめてください」

「そんなこと言ってる場合か。うーん、どうしたもんか……」

「あ、時間やばい！ お兄ちゃん、遅刻するよ！」

時計を見ると学校まで走らないと間に合わない時間になっていた。

「本当だ。じゃあ、このことは帰ってきてからまた考えよう」

「そうだね」

「あの、湊どこか行くの？」

「学校に行くんだ。悪いけど、家で大人しく待っててくれるか？」

「うん、わかった」

「よし、いい子だ」

なんとなくいつも千夏にやってるみたいにみやこの頭を撫でた。

「ふぁ……」

みやこは気持ちよさそうに目を細めてかすかな吐息をもらした。

「あ、ずるい。お兄ちゃん、私にも」

「そんな暇ない。ほら、急ぐぞ」

「ううー……ケチ」

それから学校に行く準備をして、不満そうな顔をした千夏といっしょに学校へ向かった。

第一話（後書き）

久しぶりに投稿しました。ペースは遅いと思いますが、お付き合いいただけたらと思います。どうか、よろしく願いします。

第二話

「そついえば、みやこのお昼ご飯はどうしよう？」

授業の合間の休み時間でふと思った。ポケットから携帯を取り出してとりあえず千夏にメールしてみる。すると、5分もしない間に返信がきた。

『お昼休みに家に戻って作ってあげたら？』

どうやら千夏はみやこについては全部俺に任せるつもりみたいだ。でも、家で一人っていうのも可哀想だからお昼休みに一度家に帰るか。

「それに本当に記憶喪失だったらいろいろ不安だろうしな」

携帯をパチンと閉じて一人で呟いた。とりあえず、お昼休みに一度家に帰ることにした。

「急がないと時間無いな」

お昼休みの時間になってすぐに教室を出た。スーパーで少し買い物をしてからじゃないと家に何もなかったはず。

「最悪、午後の授業は遅刻だな……」

スーパーで買い物済ませて、あれこれ考えているうちに自分の家に着いた。

「あれ？」

玄関の扉に手をかけたところで違和感に気付く。

「確か、出て行く時に鍵かけたよな？」

今日出て行くとき確かに鍵をかけてから学校に向かったはず。けど、かかっているはずの鍵がかかってなかった。

「どういうことだ？」

もやもやしなから家に入る。そして、自分の部屋で待っているであろうみやこに声をかけようと思って自分の部屋に向かった。

「みやこー……。あれ、いない？」

部屋の中には誰もいなかった。布団をまくってみても誰もいなかった。

「今朝の事は夢だったのかな……？」

そう思ったけど、＼シャツが一枚減っているのを見ると夢じゃないと判断する。

「まさか、外に行ったのか？」

俺は慌てて玄関に向かった。玄関にいつも置いてあるはずの俺のサングダルが無くなっているのに気づく。

「家で大人しく待つてろって言ったのに」

俺は外に出てみやこを探しに出かけた。裸にＹシャツのまま出かけたとしたら下手したら警察に捕まっているかもしれない。

「……ねえ！ 困るよ！」

近くの商店街まで出てきたところで、八百屋のおじさんが大きな声を出して何やら困っていたので様子を見てみるとＹシャツ姿のみやこがいた。

「だから、これは商品なんだから！ お金払ってくれないと困るんだよ！」

「おじさん、ちょっといい？」

「おう、湊じゃないか。今ちょっと忙しいから後にしてくれるか。このお譲ちゃんリンゴを勝手に食べた上に金を持ってないとか言いやがってな」

「ごめん、こいつ今家で預かってるちょっと世間知らずな子なんだ。リンゴの代金は俺が払うよ」

「そうなのか。ちゃんと教えておかないとダメだぞ！」

「すみません。ほら、みやこ帰るよ」

「……」

ぼーっとしていたので俺はみやこの手を取って歩き始めた。そのま

ま家まで戻った。

「大人しく家で待っててって言ったじゃん！」

今は俺の部屋でベットにみやこを座らせてお説教をしていた。

「どうして外に出たの？」

「……お腹すいたから」

「それは、うん、まあしょうがないか」

朝の事で気が動転していてお昼の事まで考えられなかった俺にも責任はあると思ったので、これ以上は説教はできなかった。

「じゃあ今から作るから部屋で待ってて」

「わかった」

そうしてキッチンに立ってお昼を作り始める。今日はチャーハンにしよう。

「……」

俺はさっき「部屋で待ってて」と言っただけだった。でも、今みやこがいて後ろでじーっと見ていた。

「出来た」

視線が気になったけどチャーハンはもうできたのでテーブルに持つ

ていく。みやこは椅子に座って待っていた。

「はい、いただきます」

どんぶりにチャーハンを盛ったのでお箸でいいと思い、みやこの前にお箸を置いた。

「はぐっ」

置いたお箸を見もせず、みやこはどんぶりに顔を突っ込んでチャーハンを食べ始めた。

「え、ちよつと！ お箸使おうよ！」

「？」

みやこの手にお箸を持たせてたけど、すぐにポロっとお箸を落としてしまった。

（あ、お箸の使い方覚えてないのか）

そう思ったのでキッチンからスプーンを持ってくる。まずは自分で使って使い方を見せる。

「ほら、こう持って……そうそう、それでこうするんだ」

みやこにスプーンの使い方を教えながらのお昼はずいぶん時間がかった。けど、みやこはスプーンが何とか使えるようになった。

「あー、顔に油ついてるじゃん。ほら、こっちきて」

ティッシュを取ってみやこの顔をぐしぐしと拭いてあげる。なんか、妹が一人増えた気分だ。

「ありがとう！」

お礼を言ってみやこが抱きついてくる。またしても突然のことだったので、どうしていいかわからず頭の中が真っ白になってしまった。

「くんくん、湊いい匂いする」

「……チャーハンの匂いじゃないの？」

「うっん、とっても優しい匂い。安心する……」

「あ、あのさ、何か思い出したりとかした？」

いつまでも抱き合っているわけにもいかないの、みやこを引き離して話を誤魔化すことにした。

「何も思い出せない。湊しか覚えてない」

「何で俺の事はそこまで強く覚えてるんだ？」

「わからない……。わかるのは私は湊に会いたかったの。湊に会いたくて会いたくてたまらなかったの」

瞳をウルウルさせながら上目使いでみやこはこっちを見たのですごくドキッとした。

「そうか……。うわ、ヤバい。午後の授業始ってる」

部屋にあった時計を確認すると授業が始まって10分は経っていた。

「じゃあ俺はもう一回学校戻るけど、今度こそお家で大人しくしてくれよ」

「湊またどこかにいくの？」

「すぐに帰るようにするから少しだけ我慢してくれるか？」

「うう……。わかった、早くしてね」

「わかった」

みやこの頭をくしゃくしゃに撫でて俺は学校へ戻った。教室に付く頃には午後の授業の一つ目は終わっていた。

第三話

今日の授業もあと1時間となってその前の休み時間。今日の夕飯はどうしようかと考えてると前の席のやつが話しかけてきた。

「湊が学校サボるなんて珍しいね」

「いろいろと事情があるんだ」

「ふーん、そういえば宿題してきた？ 次の授業のやつだけど」

「やべっ、やってない。響、見せて」

「だと思った。はい」

こいつは御代響^{みしろひびき}。高校入学からの友達でいろいろと相談したり、相談されたり今となつては親友だ。

響は千夏と同じくらいの身長で、整った顔をして綺麗な肌と女の子だったら完璧な顔だけど残念ながら男。女の子も羨むような体格で、もしかしたら女の子なんじゃないかと時々疑ってしまう。

本人は面白がつて時々女装をしたこともあった。思いのほか楽しかったみたいで今となつては趣味に近い。女装が趣味である。ちなみにクラスでは俺しか知らない。

響の両親は有名な医者でお金持ちのボンボンである。響自身もかなり成績優秀で将来は両親と同じ医者を志している。

「そうだ。響、今日の放課後暇か？」

「別に暇だけど……、何か用事？」

「ああ、ちよっと一緒に悩んで欲しい」

「悩むの前提なんだね。まあ、いいよ。湊の頼みなら断れないし」

「悪いな。今度なんかおごるから」

「別にいいよ。どうしてもって言うなら、今度お弁当作ってきてよ」

「弁当？ お前いつも豪華な弁当持ってくるじゃん」

響野弁当はいつもメイドが作ってくれるらしく、ものすごい豪華でものすごいおいしい。

「僕は湊の料理の方が好きなんだよ。僕の家は味付けが薄いんだもん」

「ま、そんなことでいいなら今度作ってくる」

「よろしくー」

そうしてチャイムとともに先生が入ってきて授業が始まった。……宿題を移すの忘れてた。

「湊の事だからまた猫でも拾ったのかと思ったけど……。まさか人間だったとは」

そして放課後、響と一緒に家に帰ってきた。帰つてるときに大雑把に事情を説明はしておいた。

「つまり、朝起きたら美少女が隣で寝ていたと」

「まあ、そういうことになるかな」

「そして、何も覚えてないと」

「そういうことだ」

「湊の妹にしちゃえば？」

「間に合ってます！」

今は俺の部屋で話し合っている。みやこはいつの間にか俺の膝を枕にして寝ていた。

「それにしても、湊に懐いてるね」

「身に覚えが全くないんだけどな」

つられて俺はみやこの髪を撫でる。サラサラしていてとてもさわり心地がいい。

「わかった、服は何着か用意してあげるよ」

「助かる。背丈的に響は同じくらいだろ？」

「そうだね。千夏ちゃんより少し大きい感じかな」

「あいつは未だに小学校の時の服が入るくらいだからな」

「うーん、さすがに下着は用意してあげられないからそれは何とかしてね」

「そ、そうか。その辺は千夏に任せるか」

今は近くのコンビニで買ってきたやつを使ってもらってる。残念ながらブラまでは売ってなかった。つまり……早めに買ってあげないといけないということだ。

「今度の休みにでも買い物に行くよ」

「それなら僕も行っていかな？ 僕も買いたいものがあるんだ。女の子の場合で」

「つまり女装で来るのか？」

「うん」

「……わかった。駅前のデパートだけどいいか？」

「もちろん。詳しい時間はまたメールして。じゃあ、僕は今日これで帰るね」

「おう、わかった」

「服は夜にでも届けさせるよ」

「悪い、助かる」

「ただし、約束忘れないでねー」

「了解。明日のお昼はお前の好きな甘い卵焼き入れて作るよ」

「さっすが、湊。わかってるー。それじゃー、また明日ー」

響を玄関先まで送ってから部屋に戻る。部屋ではみやこがベットで無防備に寝ていた。ちなみに今は俺のジャージを着ている。

「ここまで無防備だとむしろ誘われてるみたいだな……」

だが、ここでケダモノみたいに襲いかかるような度胸はあいにく持ち合わせていないので、みやこを起こさないように静かに本を読むことにした。

「ただいまー、お兄ちゃん入りますよー」

千夏が部屋に入ってきた。制服を着替えて普段着である。

「まず、みやこさんの寝るところですね」

三人そろったところで朝の続き、決めないといけないことがいろいろあった。

「私は湊と一緒にいい」

「ダメに決まってます！ 私の部屋に布団をひきますからそこで寝てくださいー！」

「うう……。千夏いじわる……」

「服はどうするんですか？ 下着も買ってあげないと可哀想ですよ」

「服は今夜響が送ってくれる。下着は……今度の休みに買いに行きたいけど千夏は大丈夫？」

「もちろん、大丈夫です。じゃあ、買うのは下着だけですね」

「よし、とりあえず晩御飯作るよ」

俺はキッチンに向かった。後ろをひよこひよこ、とみやこがついてきた。そして、昼と同じようにずっと俺を見ていた。

今日はカレーを作った。三人分お皿に盛りつけてテーブルに運ぶ。

「……いただきます」「」

「うまい！ やっぱり、お兄ちゃんが作るカレーはおいしいですね！」

「千夏も料理くらいできるようにならないとダメだぞ。今度から当番制にしようと思ってるんだから」

「ええー、お兄ちゃんの料理が毎日食べたいです。私は掃除とか洗濯ならやりますよ」

「まあ、それでもいいか。そうだ、後でみやことお風呂入ってくれるか？ 多分わからないと思うから」

「わかりました。じゃあ、みやこさん、後で一緒にお風呂に入りましょうね」

「??」

みやこは何の話をしているかわからないような顔をして頷いた。

第四話

ピンポンと玄関のチャイムが鳴った。

「誰だろう。もしかして、響からの服かな」

俺は立ち上がって玄関に向かった。ドアを開けるとそこにはメイドさんが立っていた。前に会ったことがる、確か高森^{たかもり}さんだ。

「こんばんわ。響様からこちらの荷物を届けるように言われて参りました」

「ああ、すいません高森さん。……多いですね」

「響様はこれでも少ない方だとおっしゃっております」

「まあ、ありがとうございます。響にも伝えといてください」

「かしこまりました」

丁寧に頭を下げてから高森さんは夜の住宅街に消えて行った。段ボール3つを残して。

段ボールを千夏の部屋に運んで開けた。中からいろいろな服が出てきた。フリフリスカートとかも出てきた。

「それにしてもいろいろ持ってきてくれたんですね……」

「千夏の分も入ってるみたいだぞ」

みやこの分が段ボール二つでもう一つは千夏に分だった。

「あ、これ可愛い。お兄ちゃん、これとかどうですか？」

そういつて千夏は段ボールから白いワンピースを取り出した。これを千夏が着ているところを想像するととても似合っていた。

「うん、いいんじゃないか。似合いそうだぞ」

「本当ですか！？ 今度の休みはこれ着て行こうかな」

「そろそろお風呂入ってきたらどうだ？ 服もちょうど来たわけだし」

「そうですね。みやこさん、その服持って行きますよ」

「うん」

千夏とみやこが仲良く手を繋いでお風呂場に向かって行った。なんか仲のいい姉妹に見えた。

「来週はずつと響に弁当作って持っていてやるか」

そう決めて俺は部屋に戻った。パソコンを開いてインターネットで料理のレシピを探すことにした。

「――！！」

二人がお風呂に入ってからずっと騒がしかったのでちょっと注意し

に行くことにした。

「二人ともー、ちょっとうるさいからもう少し静かにしてねー」

「あ、湊！」

「あ、ダメです！ みやこさん！」

「え？」

ガチャつとお風呂場からみやこが慌てて出てきた。髪とか体とかびちょびちょのまま、というか裸のままだった。

「うう、目がピリピリした。あと、水がとっても熱かった」

「みみみみやこ、できるだけこっちを向かないでそのままお風呂場に戻ってくれないか？」

「やだ、お風呂怖い」

そう言いながら俺の服の裾をギュツとつかんで離さないみやこ。見ないように目をつぶっていてもシャンプーの匂いとか、みやこの少し乱れた呼吸がはつきり聞こえたりした。

ヤバい、俺の理性とか自制心とかが崩壊してしまいそうだ。

「ほら、みやこさん。戻りますよ！」

体にバスタオルを巻いた千夏がみやこの手を掴んでお風呂場に引っ張り戻した。危ないところだった、本当に……。

「もう少しで出るからお兄ちゃんのリビングで待っててください！」

「わかった」

そして、リビングで待つこと10分。疲れた顔をした千夏とさっぱりしたみやこが出てきた。二人とも色違いのパジャマを着ていた。

「湊ー！」

「おっと」

ガバーッと抱きついてくるみやこを受け止める。ふわっとシャンプーのいい匂いがした。

「えへへー、湊ー」

「あー、みやこさん、まだ髪乾かしてないんだから。そんなことより、お兄ちゃんから離れてください！」

「なら俺がやってあげるけど。ほら、ドライヤー貸して」

「ええ！？　なら私もやってくださいよ！」

「わかったわかった。じゃあ、千夏から」

千夏を膝の上に座らせて、ドライヤーのスイッチを入れて千夏の髪を乾かしていく。

千夏の髪はみやこほど長くはないけど肩まで伸びている。昔、みや

こくらいまで伸ばしたことがあったけど1ヶ月で「手入れがめんどくさい!」と言ってやめてしまった。

「はい、おしまい。次はみやこ、おいで」

「うんっ!」

嬉しそうな顔をして俺に思いっきり抱きついてきた。そういう意味でおいでって言ったわけじゃないけどな。

「そうじゃなくて、さっきの千夏みたいに座ってくれるといいんだけど……」

「そうです! 変わってください!」

「千夏!? 言ってることが違うよ!」

「みやこさんはお兄ちゃんに抱きつきすぎです。私だって抱きつきたいんです!」

「千夏もそろそろお兄ちゃん離れする頃だと思っただけど……」

「私がお兄ちゃん離れすることはないですっ! とにかく、みやこさんはこう座ってください!」

「こっつ?」

やっとみやこがさっきの千夏のように膝の上に座ってくれた。みやこの髪は長いので時間がかかりそうだ。

「よし、もういいかな」

「ねえ、湊。頭撫でて」

「ん？ いいよ」

みやこの頭の上に手を置いて優しく撫でる。乾かしたばかりの髪がふわふわしていた。

「ふぁ……」

気持ちよさそうにうつとりとした表情をしていた。その表情がすごく可愛かった。

「お兄ちゃん、私も！」

「わかったから、ほらこっちきて」

右手でみやこの頭を撫でて、左手で千夏の頭を撫でた。本当に妹が増えた気分だった。

その後、たつぷり10分くらい撫でてからやっと解放されて風呂に入った。今はベットで少し本を読んでいた。

「ご飯セットしてからもう寝るか」

明日の朝はお弁当とみやこのお昼分を作らないといけないと思ったので早めに寝ることにした。

第五話（前書き）

久々の投稿になりました。これからどんどん更新できたらします！

第五話

「……なんでだろうな」

昨日は確かに一人で布団の中に入ったはずなのに、目を覚ますと隣では俺の右腕に抱きつく感じでみやこがスヤスヤ寝ていた。

「千夏が寝てからこっそり抜け出したんだろうな。どうしよう、動けない……」

みやこが右腕をがっちり抱きしめているので身動きが取れなかった。右腕にみやこの胸がふにふに当たっていた。やばい、すごい柔らかい。

寝顔をチラッと盗み見てみる。何度見ても顔の作りが普通の人と全く違うんじゃないかと思うくらいの美少女だ。ぷっくりした唇とか無意識に吸い込まれそうになる。

「お兄ちゃん！ みやこさん来てるでしょう！」

突然ドアが開いて勢いよく千夏が入ってきた。俺は慌ててみやこから顔を離れた。

「やっぱり！ みやこさんばかり！ 私も一緒に寝る！」

そういつて布団に潜り込んできて俺の左腕に抱きつく。ちょっと待て、なんだこの状況。

「いやいや、千夏！？ そろそろ起きて朝食の準備しないと！」

「何ですか！ 私は一緒に寝ちゃダメって言うんですか！」

今にも泣きそうな顔で千夏は訴えてきた。その顔に思わず戸惑ってしまう。

「……わかったよ！ 今日の夜は一緒に寝ていいから、だから泣くな！」

「本当ですか！」

花が開いたように千夏の顔がパツと笑顔になった。千夏のお兄ちゃん離れは当分先になりそうだと思った。

なるべくみやこを起こさないようにそつとベットを離れ、キッチンで朝食を作った。その後、お弁当とみやこのお昼も作った。

「それじゃあ、行ってくるけど。お願いだから外に出ないようにね」

「うん、わかった」

「暇だったら私の部屋のマンガ読んでいいですからね」

「うん」

「じゃあ、いつてきます」

千夏と二人で学校へ向かった。千夏とは学校が違っけどいつも途中でまで一緒に行く。

「それで、お兄ちゃんのみやこさんをどうするつもりなんですか？」

「どうするつもりって？」

「このまま家で預かるわけにもいかないでしょ？ ママたちにはなんて説明するんですか？」

「母さんたちはまだ帰ってこないだろ？」

「うっん、一度帰ってくるみたいですよ。来週私の誕生日だから」

「……俺の誕生日の時は『誕生日おめでとー』ってメール来ただけなんだけど」

俺はがつくりと肩を落とした。扱いに差がありすぎるだろ！ お兄ちゃんだから我慢しろって言うのか！？

「ま、まあ、それは置いといて。まさか、拾って来たとか言うわけじゃないですよ？」

「それもそうだな……」

理由はどうであれ、母さんたちが帰ってくるわけだ。見知らぬ女の子が増えてたら……。

「母さんの性格なら大丈夫じゃないか？」

「……そうかもしれないですね」

俺達の母親は何と言うか自由だ。教育方針というか、とにかくノリのいい人だ。どんな状況でも「ま、何とかなる」と思っている人だ。

「でも一応説明しないといけないですよ。拾ってきましたって言うときですか？」

「それでいいかも……」

正直、その場のノリで生きているような人だ。事情を説明すればわかってくれるだろう。

そして、千夏の誕生日の前日に本当に母さんたちは帰ってきた。思えば4ヶ月ぶりくらいだった。

早速家族で集まって会議になった。もちろん、みやこの事を説明するためだ。

「そっか。じゃあ、しばらく家で預かりましょう」

俺が予想した通りの回答だった。さすがに父さんはビックリしている。

「だって、記憶喪失なんですよ？ えーっと、みやこちゃん？」

「……っ、はい」

小動物のようにプルプル震えながらみやこが答えた。今にも泣きそうな顔をして俺の背中に隠れてしまった。

「へえー、湊に懐いてるのね。歳は……湊と同じくらいか」

「まあ、事情が事情だしな。いいんじゃないか」

まさか、父さんまであっさり受け入れてくれるとは思ってもいなかった。それで少しびっくりした。

父さんは小さいころから厳しい人で、猫を飼うときも最後まで認めてくれなかった。てっきり父さんは「警察に任せたほうがいい」と反論すると思っていたくらいだ。

「とにかく！ みやこちゃんは家で預かります。湊の妹、千夏のお姉ちゃんってところね。助け合って生きてくのよ」

「妹ってわけじゃないだろ……」

「あら、いいじゃない。家族が増えるのは悲しい事じゃないでしょ。それに、みやこちゃんとっても可愛いし」

お母さんは近寄ってきて怯えるみやこを抱きしめた。初めは戸惑っていたみやこだったが少しずつ大人しくなった。

「うーん、可愛いわ。ねえ、みやこちゃんは欲しいものはある？何でも買ってあげるわよ」

「……私は湊が欲しい」

「わかったわ、あれでよければ」

「ちょっと待て！勝手に息子を人にあげるな！」

「そうです！ 私に下さい！」

「千夏！？」

そんな、千夏はお兄ちゃんの味方だと思ってたのに！？

「そっかー、千夏も湊が欲しいか。湊、どうしようか？ どっちにする？」

「そんな選択を俺に押し付けるな！ そんなの選べるわけないだろ！」

「そこは「二人とも俺のものだ！」くらい言いなさいよ。相変わらず優柔不断な男ねー。パパにそっくりだわ。じゃあ、二人で仲良く分けなさい」

「分けるの！？ 俺の意見は無視！？」

「しょうがないですねー」

「わかった」

「二人はそれで納得するの！？」

久しぶりに家族そろったと思ったたら相変わらず騒がしい。しかし、それがどこか懐かしかった。

そして、突然父さんに呼ばれて俺の部屋に向かった。真面目な顔をしていたので何かあったのかと思ったら全然違うことだった。

「二人を任せたぞ」

「わかってるよ、そんなこと」

「ならいいんだ。悪いな、千夏の事とか任せっきりで。本当は俺達親の役目なのにな」

「大丈夫だよ。父さんも母さんも忙しいんだし。俺じゃ不適任かもしれないけどちゃんと二人の面倒見るよ」

「いや、お前は本当にしっかりしているよ。千夏にみやこちゃんの事、頼んだぞ」

「うん。……喉乾いた、何か飲み物持つてくる」

父さんに二人の事を任せられ、会話が途切れ気ましくなったので一度リビングに戻った。リビングでは女三人が集まって何やら話し合いをしていた。

「……がいいです!」

母さんが絡んできるとまともなことを話してないなと思ってお茶を取ってすぐに部屋の戻った。父さんと学校や成績についていろいろ話した。

第六話

「お兄ちゃん、ちょっといいですか？」

ある休日、部屋でパソコンを開いて適当にサイトめぐりをしていると千夏が部屋に入ってきた。みやこはベッドでスヤスヤと寝ていた。

「いいよ。どうした？」

「お姉ちゃんの事でちょっと話したいので、ちょっと私の部屋に来てください」

「……わかった」

母さんと父さんがまた仕事で外国へ戻って1ヶ月が経とうとしていた。あの時から千夏はみやこの事をお姉ちゃんと呼ぶようになった。今では本当の姉妹みたいにいつでも一緒にいる。

鬱陶しかった梅雨も終わり夏本番になろうとしていた。学校はあと少しで夏休みが始まる時期だ。

「で、どうした？ 勉強でも見てほしいのか？」

ちょっと久しぶりに千夏の部屋に入った。千夏もそろそろお年頃なので、男の俺はあまり入らない方がいいと思って用がある時以外は入らないようにしていた。

「お姉ちゃんの記憶についてなんですけど……。なんとか取り戻し

てあげられないかな？」

「それはちょっと難しいんじゃないか？ きつかけとかあればいいんだと思うけど……」

「多分関係ないと思うんだけど、お姉ちゃんの右側のふとももに大きな傷跡があつたんです。「これどうしたの？」って聞いてみたけどやっぱり覚えてないみたいで……」

「何か事故でもあつたのかな？ もしかして、それが原因で記憶喪失になったのかも」

「そうかもしれないですけど、本人が覚えてないのではわからないですよ……」

うーん、と二人で考え込んでしまった。確かに、いつまでもみやこが記憶喪失のままっていうのも可哀想だし、何とかしてあげたいと思うけどどうしたらいいかわからない。

「ちょっと響に聞いてみるか。午後にみやこ行ってくる」

「わかりました。そういえば、今日はあの日じゃないですか？」

「……ああ、そうだった。帰りに寄ってくるよ」

「わかりました。晩御飯は私が用意しておきますよ」

「うん、ありがとう」

そして、響に電話して聞きたいことがあるから午後にみやこに行く

と伝えた。響は「うん、いいよー」と軽い感じに答えた。

「相変わらず広いな……」

そして、俺は約1ヶ月ぶりに響の家を訪ねた。何度来てもビックリするほどの豪邸、毎回緊張しながら入る。みやこもビックリしているのだろう、周りをキョロキョロ見渡して、俺の裾をギュツとつかみながら後ろを歩いている。

「いらつしゃーい。どうぞ、こっち座つて。紅茶入れてあるから」

「ああ、ありがとう」

案内された部屋は、とにかく豪華な広い部屋だった。大きめのソファで響がこちらに手を振っていたのでソファの向かいに俺はゆっくりと座った。隣にみやこも座る。

「それで、何か聞きたいことがあるんだっけ？」

ティーカップに口をつけながら響は聞いてきた。俺は一度みやこを見てから響の方を向いて質問に答える。

「みやこの記憶を取り戻してあげたいと思うんだ。何かいい方法はないか？」

「みやこちゃんの記憶か……」

響が難しい顔をしてみやこの方を見た。親が医者で、本人も医者を目指しているなら少なくとも俺達より詳しいと思って聞いてみた。

「一般的に記憶を戻す方法は催眠療法できっかけを促して思い出させるって感じかな。でも、みやこちゃんの場合湊の事は覚えてたんでしょう?」

「……うん」

「だとすると、過去に湊となんらかの関係があったと思うんだけど……。湊はみやこちゃんと会った覚えはないんだったよね?」

「ああ」

「うーん、みやこちゃんの記憶違いか湊が忘れてるのか、かもしれないね。もし記憶喪失だとしたら、本当に何も覚えてないんだ。でも、みやこが湊のことは覚えてるってことは記憶喪失じゃないかもしれない」

「記憶喪失じゃないかもしれない?」

「可能性だけだね。例えば、すごい嫌なことがあつて無理やり忘れちゃったとか。まあ、現実逃避みたいなもんだね」

「そうか……」

「あちっ!」

みやこが紅茶を飲もうとして口をつけたけどまだ熱かったみたいだ。すぐに口を離してふーふーと冷ます。

「みやこちゃん、猫舌なんだ?」

「そうみたいだ。まあ、みやこの事はじっくりと考えていくよ」

「それがいいと思うよ。何かあったら言ってよ、手を貸すから」

「ああ、ありがとう。そうだ、ケーキ作ってきたんだ」

「ホント！ よし、食べよう！ お皿とフォーク用意するね」

その後、三人でケーキを食べて学校の事とかいろいろしゃべった後、響はみやこに色々な服を着せて楽しんでいた。

「じゃあ、今日はありがとう」

あつという間に夕方になったので響の家を後にすることにした。これから行かなければならない場所もあるからだ。

「こちらこそ、ケーキご馳走さま。あまり力になれなくてごめんね」

「いやいや、聞いてくれただけでも十分だ」

「うん。じゃあね、湊、みやちゃん」

「おう、またな」

「……バイバイ」

そして、俺は響と別れてからある場所へ向かった。そこは小学校の頃から毎年この日には通っている場所だった。

「ふう……」

そこは小学生の時に千夏とよく遊んだ空き地だった。中に入っていく、端に作られた小さな墓の前にやってくる。

「これは……お墓？」

「……そうだ。これは俺が救えなかった猫のお墓だ」

第七話

それは俺が小学生の時のことだった。

俺は学校が終わるといつも家の近くの空き地で友達と遊んでいた。

ある日、たまたま一人で空き地で遊んでいると一匹の黒い子猫が段ボールに捨てられているのを見つけた。

その子猫は弱々しく「ニャー……」と鳴き、寒そうにフルフルと震えていた。

家に持って帰ろうかと考えたけど、母は猫アレルギーで猫が大っ嫌いだった。昔、こっそり家に持って帰った事があったけど見つかってしまい、俺は反省しろと言われ三日間家に入れてもらえなかった。

そのこともあって、猫を家に持って帰るのは躊躇った。けど、放つてもおけなかったから学校の給食の残りをあげたり、寒くないように家からバスタオルを持ってきて包んであげた。

そのおかげなのか、初めて見た時弱々しく鳴いていた猫がすっかり元気になった。最初は警戒してあまり近づいてこなかったけどだんだんと懐いてくれた。

一緒に鬼ごっこみたいなことをして遊んだりもした。休みの日にだっこしてお昼寝したりもした。

雨が降った日は、夜に家をこっそり抜け出して傘をさしてあげたり

もした。

そして、猫の面倒を見始めて一週間経ったある日、学校が終わって家に帰ると突然母さんに呼ばれた。話は子猫についてだった。

「あんた、夜中にこっそり抜け出して猫の世話してるでしょ？」

「……」

「気づいてないとも思った？ あんたが夜中抜け出してる時はパパが後について行ってたからいいけど、黙って夜中に家を出るのはもう禁止です」

「でも、可哀想だから……」

「……しょうがない、じゃあ、家で猫を飼うのを認めるわ。そのかわり、最後まで責任もって面倒見るのよ」

「……うん！ お母さん、ありがとう！」

俺は大喜びしてすぐに家を出て空き地に向かった。お家に連れて帰ったらまずお風呂に入れてあげよう、それから名前は、と走りながら考えてた。

（名前は決めてあった、確かメスだったから……）

そして、もう少しで空き地に着くところまで空き地の前の道路に人だかりができていた。

その人だかりはどうかやら何かを見ているみたいだった。何だろうと

思つて俺もその人達が見ているものを見に行つた。

「え……」

それを見て俺は混乱した。

それはこれから俺が家に連れて帰つて育てようと思つていた子猫だった。目立つた外傷はなかったけど、体の周りには血だまりができていた。

周りの人たちは「気持ち悪い」とか「うわー、グロ」とか「可哀想……」と言いながら見ているだけだった。

俺は周りの人たちを押しつけて子猫を抱き抱えた。昨日は暖かかった体が氷のように冷たくて泣きそうになった。

抱き抱えると周りの人は「うわ、キモ……」「よく持てるな……」と俺を汚いものを見る目で見てきた。

それでも、周りの人が何か言ってるのも気にせず俺は空地の端まで持つていった。そして、穴を掘つてそこに子猫を埋めた。

「……っ、どうして……っ、うう、うわああ、うわあああああ
！！」

そして、俺は泣いた。もつと早く家に連れて帰つてあげればこんなことにはならなかったのに！ もつと早く母さんを説得すればよかったのに！

お墓の前で夕方まで泣いて、なかなか帰つてこないのを探しに来た

母さんに説明して、また泣いた。

それから、毎年子猫の命日には顔を出すことにした。意味がないとわかっていても止めるつもりもなかった。

「まあ、償いみたいなもんだよ。だから……」

「……うあ」

「みやこ？」

みやこを見るとみやこは泣いていた。涙がポロポロと零れる。

「うわあああああ！うわああああん！！」

みやこは突然その場に泣き崩れた。俺は突然のことで戸惑ってしまった。

「うわあああああ……っ、うわああああん！」

「どうした！？　だ、大丈夫か！？」

泣きやまないみやこをなんとかしないと、思っただけ俺はみやこの体を強く抱きしめた。抱きしめるくらいしか思いつかなかった。

「ううう、湊、湊、うわああああ！」

みやこが強く抱きついてきたので俺は答えるように強く抱きしめた。みやこが泣きやむまですっとなぐり抱きしめていた。

「……っ、ひつく……」

「落ち着いたか？」

やっと泣きやんだので近くのベンチに座わらせた。俺も隣に座る。

「うん……ごめんなさい」

「でも、どうして突然泣き出したんだ？」

「……わからない」

「……もしかして、あの猫と関係あったのかな？ あの人だけに居たとか？」

「わからない……」

すでに夕方になって暗くなり始めていたので、俺達は家に帰ることにした。一緒に立つと泣き疲れたのか、みやこはフラフラしていた。

「大丈夫か？ ほら、背負ってやるから背中に乗れ」

「うん……」

俺はしゃがんでみやこを背負った。風で飛ばされないか心配になるほど軽い体だった。

「しっかりつかまってるよ」

「うん……。ありがとう……」

そして、そのまま家に帰った。家に着いたらみやこは寝ていた。起
こさないようにそっとベット入れてそのまま寝かせた。

第八話

「ふーん、そんなことがあったんですか……」

「多分、あの時の猫と関係あるんじゃないかって思うんだ」

とうとう夏休みが始まった。毎日、外ではセミが大合唱をしていてうるさかった。

みやこには少し席をはずしてもらって、千夏と二人でみやこと空き地に行った時の事について話し合っていた。

「それが、空き地でお兄ちゃんとかあったのかもしれないですね」

「そうかもしれない……。ん？ ああ、響からメールか」

ズボンのポケットで携帯がバイブレーションしていた。響からメールが来ていた。

「えーっと、『夏休みだし、暑いし、海行かない？ 僕の家のお別荘に招待するよ。もちろん、泊りで』だつてさ」

「海！？ しかも別荘ですか！ もちろん行きましょーうよ！」

「そうだな。じゃあ、とりあえず行ってくつてメールする」

メールを返信した5分後、また響からメールがきた。

「なになに『それじゃあ、来週の月曜から木曜日の三泊四日でやるから。当日迎えに行く』だって」

「そうですか！　じゃあ、急いで準備しないといけないですね。お兄ちゃん、水着買いに行きましょう！　お姉ちゃんのやつも買わないといけないですから！」

「そうだな……。午後に買いに行こうか」

「はい！」

そして、お昼ご飯を食べてから三人で駅近くのデパートへやってきた。そのまま水着売り場へ向かった。

「うーん、どうしようかな……」

千夏が水着をあれこれ手に取り、みやこと一緒に見ていた。俺は「本屋に行ってるから」という意見を却下され強制的に一緒に回るこ
とになった。

「試着しましょう、お姉ちゃんはこれです」

水着を手に取り二人で試着室へ向かっていった。今のうちに……と考えたが「お兄ちゃんは試着室の前で待っていてください！」と釘を刺されてしまった。

「お待たせお兄ちゃん、どうですか？」

カーテンが開き千夏が出てきた。千夏が選んだのは水色のセパレー
トの水着とパレオだった。

「お、なかなか似合ってるんじゃないか？」

「本当ですか！　じゃあ、次はお姉ちゃんです」

千夏の後ろから今度は水着姿のみやこが出てきた。みやこは白色の布の面積が少ないビキニだった。

「……みやこも似合ってるぞ」

「湊、ちゃんと見て。似合ってる？」

みやこに右手を引つ張られて顔がみやこの方へ向く。雪のように白い肌が惜しみなく露出されていて、胸がポヨンと出ていた。顔が力ーツと熱くなる。

「あー、お兄ちゃん顔赤いですよー」

「うるさいな、もういいだろ。俺はあっちで座ってるぞ」

「待ってくださいよ！　まだまだ着てみたいのは沢山あるんです！」

「二人でやっててくれ。正直、あまりここで待ってたくない」

周りが女の人ばかりなので、さっきから視線が気になって仕方ないです。

「わかりました。それじゃあ、終わったらそっちに行きます」

「おう、よろしく」

俺は自動販売機でジュースを買って階段近くのベンチに座った。そういえば、自分の水着はどうしようか。

「……去年買ったやつでいいか」

財布の状況を見ると千夏とみやこの水着を買ってギリギリくらいだろう。ほかに買わなければならぬものがあつた気がするし。

そして一時間後、やっと千夏とみやこが水着を買って戻ってきた。

「結局どんな水着にしたんだ？」

「えへへー、当日まで秘密です！　ね、お姉ちゃん！」

「うん、秘密」

二人でニコニコしながら一緒に歩いていつてしまった。なんか、ここに来る前より仲良くなつてないか？

その後、日焼け止めやサンダルなどを買ってから家へ帰った。

「千夏、毎年最終日まで宿題やらないんだから早めにやっちゃいなさい」

「えー、いいじゃないですか。せつかくの夏を楽しまないと！」

「もう今年は手伝ってあげないからな」

「そんな！　お兄ちゃんだけが頼りなのに！」

「じゃあ、教えてあげるから今からやるぞ」

家に帰って晩御飯の後、夏休みの宿題を終わらせようと思い、千夏を巻き込むことにした。

「湊、何してるの？」

ベットで寝ていたみやこが目を覚まして隣にやってくる。長い髪が少しばさばさで寝癖がついていた。

「ごめん、起こしちゃった？ まだ寝ててもいいよ」

「じゃあ、一緒に寝よう？」

「ダメです！ お兄ちゃんとは私が一緒に寝ます！」

「どっちとも一緒に寝ません！ ほら、千夏は宿題持ってきた？」

「ううー……、最近のお兄ちゃんは厳しいです。寂しいです」

「最近、千夏に甘くし過ぎたと思うから教育方針を見なおしたんだ」

「それは間違いです！ 私不良になっちゃいますよ！ 舌打ちとかしちゃいますよー！」

「俺はそんな子に育てた覚えはないぞ！」

「じゃあ、今日は一緒に寝てください。それで改心します」

「そんなんでいいのかよ。ずいぶんとかわいい反抗期だったな……」

「じゃあ、私も改心する」

「おっと、みやこも反抗期だったのか……」

「じゃあ、今日は三人で寝ましょう！ あ、お兄ちゃんここわから
ない」

「三人は無理だ。そこはこの公式で解ける」

適当な会話をしながら夏休みの宿題を終わらせる。みやこは最近千夏のマングにハマっているようでベツトで横になりながら読んでいた。

「はあー、お兄ちゃん休憩にしましょう」

「まだ30分しか経ってないけど」

「でも、だいぶ終わりましたよ。お兄ちゃんは何で漫画本を読んでいるんですか？」

「もう夏休みの宿題は終わったから」

「早いですよ！ 私のやってください！」

「俺がやつちゃ意味無いだろ」

その後も、千夏は文句を言いながらもなんとか夏休みの宿題を終わらせた。

第九話

「海だああああー！！！！」

隣で千夏が思わず叫んだ。朝、響が車で迎えに来てくれて、そこに3人で乗り込み走り続けること二時間。車の窓の横には、白く綺麗な砂浜、青く透き通った海が広がっていた。

「もうすぐ着くよ。小さいけど一応プライベートビーチだから僕たち以外は居ないからね」

「プライベートビーチかよ……。さすが響だな」

助手席に乗っている響に声をかける。響は前を見たまま答えた。

「たまにしか使わないんだけどね。今年はみんなで来れてよかったよ」

「二泊三日って話だけど、食事とかはどうするんだ？」

「もちろん、僕たちで作るんだよ。材料はたくさんあるから大丈夫」

「そうか。それにしても綺麗だなー」

「着いたみたいだね。とりあえず、別荘に移動しようか」

車が止まって外に出ると、潮の香りがふわっとした。照りつける太陽で少し肌がヒリヒリする。

そして、各自荷物を持って別荘に移動することにした。

「きれいーい！」

少し歩いたところで二階建てで木造の真っ白なコテージが姿を現した。

「二階の部屋は女の子が使ってたね。僕と湊は一階の部屋を使うから」

「わかりました！ お姉ちゃん、荷物置いて早く水着に着替えましょう！」

「うん！」

みやこも嬉しそうに頷いた。こうして見ていると本当に仲のいい姉妹みたいだな、と改めて思った。

「あれ、遅かったじゃない！」

「？」

二階のベランダから声がしたので顔を向けると女の子がこちらに手ひらひらと振っていた。どこかで見たことあるような……。

「やつほー、久しぶりー」

「もしかして、雫姉さん！？」

「今、そっちいくよー」

そう言つてベランダから引つ込んだ。雫姉さんは御代雫^{みしろしずく}で響の二つ年上の姉である。

身長が俺よりも少し高く、昔は茶髪のショートだったが今は黒髪のロングになっていた。整った顔は大人びて美人になっていた。胸については……昔から変わらず、控えめだった。

小さいころは雫姉さんを筆頭に俺と響と千夏の四人で日が暮れるまで遊んでいた。今は、雫姉さんは音楽大学に進学してプロのピアニストを目指して勉強中だ。

とりあえず、四人で別荘の中に入る。中はとても広く、木造なので木の匂いがいっぱいした。

「湊、久しぶりー！ あんたは変わんないわねー」

「久しぶり、雫姉さん。……また背伸びたんじゃないの？」

「そうかも、それじゃあ早速……」

何をするかと思つたら雫姉さんが突然抱きついてきた。あまりにも突然のことで周りの三人は啞然としている。

「ちょ、ま、なんだよ！ 突然なんだ!？」

「あれ、ちょっと痩せたんじゃない？ でも、抱き心地は昔と変わらないなー。あは、相変わらず身長はあたしより低いままね」

「そろそろ離せー!」

昔から「湊はあたしの弟なんだから姉のあたしが成長管理するの！」
といいながら、俺を撫で回したり抱きついたりする。でも、俺もう
高校生になったんだからいい加減止めてほしい。

「いいじゃない、別に減るもんじゃなし」

「俺だって高校生なんだからいい加減止めろ。雫姉さんも、相変わ
らず胸は控えめなままだな」

雫姉さんにグーで頭を殴られました。ボコツという音がしました。

「つつー……」

「湊、レディに対してそれは失礼よ」

「レディはグーで人の頭を殴らない……」

「何か言った？」

「いえ！ 何でもないです！」

「湊、大丈夫？」

みやこが頭を優しく撫でてくれた。嬉しいんだけど、子ども扱いさ
れているみたいで少し恥ずかしかった。

「……あなたは？」

雫姉さんがびつくりした顔でみやこを見つめていた。そうか、雫姉
さんはみやこに会ったことなかったんだ。

「ああ、紹介する。いろいろ事情があつて一緒に住んでいる、みやかだ。記憶喪失みたいなんだ」

「……ふーん」

「みやこ、この人は御代雫。響の姉だ。凶暴だけど、結構頼りになる人だから。ああ、それと胸についてはあまり言わないように……、いつてえ!？」

「いろいろ余計よ! 初めまして、雫って呼んでくれればいいから。あたしも、みやこって呼ぶから」

「……初めまして」

俺を二回も殴ったからだろうか、すっかり怯えて俺の後ろに隠れてしまった。まるで、人見知りをする子供のようだった。

「あらら、隠れちゃった」

「雫お姉ちゃん、久しぶり!」

「千夏! 久しぶりね!、また一段と可愛くなつて」

「そ、そうですか? 雫お姉ちゃんもとても美人です!」

「嬉しいこと言ってくれるわね!。……千夏、ちよつとこっちに来てくれる?」

「はい?」

ちよいちよいと、雫姉さんが部屋の中に手招きする。千夏はそれに誘われるように部屋の中に入って行った。

「なにしてんだ？」

「さあ？ 姉貴の考えることなんてわかんないよ。先、部屋に荷物置いてこようか」

「そうするか。みやこはここで、あの二人が来るのを待っていてくれ」

「わかった」

自分の荷物を持って響の後をついて行こうと歩き始めた瞬間、雫姉さんと千夏が入った部屋から悲鳴が聞こえた。

「な、なんだ！？」

慌てて悲鳴がした部屋の前まで行って、扉越しに中の様子を聞いた。

「どうした！？」

『ちよつと、雫お姉ちゃん！？ や、やめて、ダメですって……。きやあああ！？』

「千夏！？ おい！？ 開けるぞ！？」

返事を待たずにそのまま扉を開いた。中では雫姉さんが千夏に抱きつき、両手で胸を好き勝手に揉んでいた。千夏は顔を真っ赤にして抵抗している。

「何してんだあああ!？」

「あ、湊。ちょっと聞いてよ! この子また胸が大きくなってる! Bよ、Bカップ! 何しやがったー! 湊に揉んでもらったんか!？」

「おおお兄ちゃん! 見てないで助けてくださいよ! 雫お姉ちゃん、そこはダメだってー!」

「……落ち着け、このバカ!」

興奮した雫姉さんを落ち着かせるために、雫姉さんの頭にげんこつした。「いでっ」といって、両手から千夏が開放された。千夏は少し涙目になって、俺の後ろにささっと隠れた。

「……あたしは可愛い妹の成長を確認しようとしたただけなのに」

「何が成長の確認だ! ただの欲情したおっさんだったぞ!? ほら、千夏が怯えてるじゃないか」

俺の背中に抱きついていた千夏は少しガタガタ震えていた。よっぼど怖かったらしい。

「だってあたしより大きくなってるとなんて……。どうせ、あたしは貧乳ですよー……」

両手を自分の胸に当てて、しょぼーんとふてくれていた。相変わらず、胸のことを気にしているようで何とか励まそうと言葉を選ぶ。

「えーつと、ほら、雫姉さんは背が高いじゃん！羨ましいなー！」

「……湊はどつちが好きなの？小さいほう？それとも大きいほうがいい？」

「それはー……」

突然の質問に思わず黙ってしまう。捨てられた子犬のように瞳をうるうるさせながら雫姉さんがじーっと見ている。

「どつちですか、お兄ちゃん？」

後ろに隠れていた千夏もいつの間にか仁王立ちでこちらを見ている。

「……どつち？」

いつから居たのかわからないが、いつの間にか千夏の隣にみやこが今にもな泣きそうな目でこちらを見て答えを待っている。

「……どつち？」

じりじりと壁に追い詰められていく。そもそも、好みの大きさとかそんなこと考えたことも無かったので言葉が詰まってしまう。

「……え、えつと、そう！その人に合っていれば大きさはなんでも……」

「……答えになってない！！」

思わずビクツと、怯えてしまう。もう、どうしていいのかわからな

くなって頭の中が真っ白にしまった。

「はいはい、それくらいにして。遊ぶ時間なくなるよー」

「そ、そうだな！ それじゃあ、着替えるからまた後で！」

「」「あ、待て！」「」

俺は慌てて部屋を出た。いいタイミングで響が声をかけてくれて助かった。

「相変わらずだねー。あ、みやちゃんも加わったからさらにだけど」

「助かった……。別に、胸の大きさなんて、あまり気にすることもないじゃないか」

「……湊も相変わらずだね」

「何が？」

小さくため息をついて響が部屋に戻っていつてしまった。響の言葉があまり理解できず、頭をひねりながら響の後について部屋に戻った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1440p/>

君には届かない言葉

2011年10月9日19時06分発行